

1 単元名 「秋遊びを楽しもう」（生活単元8時間）

2 単元目標

単元のねらい

○秋の自然に関心をもち、自然を使って遊びを楽しむことができる。

○どんな秋遊びをしたいか自分の考えをもつことができる。

○友達の遊びを見たり、一緒に遊んだりする中で、他者と関わりながら活動することができる。

3 「ひびきあう三の丸の子どもたち」をめざすための指導の工夫

研究課題・・・子どもが解決したい問題をもち、友だちとひびき合いながら学習する子どもの育成
手立て・・・子どもの思いや願いの育ちを見とった単元構想と授業づくり

個別支援学級ブロックテーマ

「感じる心、気持ちを伝える自分」

（1）児童の実態

【個別支援学級（個学）の子どもたち】

個別支援学級は、18名の児童が在籍する。学年や生活経験、発達の段階が大きく異なるため、普段は個別の学習が中心となっているが、同じ場でできるだけ共に学ぶ交流学习を積極的に行い、日頃から交流学級の学習に参加している児童も多い。一人ひとり個別の時間割を組んで、個学での個別の学習や交流の学習を行っている。

畑を活用した野菜作りや、個学合同での遊び、季節ごとに自然を見つける活動など、生活単元学習の時間は、多くの児童が意欲的にいきいきと活動している。教師からの投げかけに対して自分の意見を言ったり、選択肢の中から自分がやりたいことを選んだりし、主体的に学習している姿が見られた。

野菜作りについては、「今年は畑で何をしようか？」という問いからスタートし、「今年も夏野菜を作ってみたい」という児童の意見から活動が始まった。「どんな野菜を育てるか？」「どんな世話が必要か？」等、児童が考えて活動を進めてきた。

季節の自然を見つける活動では、城址公園などに行き、生き物や植物を探すことができた。昆虫を捕まえては、「教室で飼ってみたいな」と児童が自ら発言したことで、バッタを飼うことになった。また、梅雨の時期にアジサイを見た時には、「先生、写真撮ってよ！」と言った児童がいて、後日教室で写真を見ながら図工の作品づくりに活かしたりすることができた。

前期は、わかば級とのぞみ級の児童での活動が多かったが、後期になり、みんなの教室の児童も一緒に活動に参加することが増えている。集団での活動が苦手な児童も、個学という小集団の中でできる範囲で活動できるようになってきている。

【聴く・話すについての指導】

児童によってかなり差があるが、日頃から、各学級で聴く・話す場面を設定し、聴く力・話す力を身につける指導を行っている。

わかば級では、国語の時間に個別の課題を通して語彙を増やせるようにしている。語彙が少ない児童や、自分の気持ちを言葉で表すことが難しい児童が多いので、まずは適切な言葉を使って相手に自分の気持ちを伝えられるように指導している。また、聴く・話す場面では、相手を見ることや、相手に伝わる声の大きさなどを意識させるようにしている。

のぞみ級では、朝の会の発表の活動を通して、自分の意見や考えがあっても相手の方に体を向けて最後

まで話を聴くことを指導している。また、日常生活の中で適切な言葉遣いで相手に自分の考えを伝えられるようにしている。

みんなの教室では、日常生活の指導（帰りの会）に聴く・話す場面を設けている。「先生の話」で3ヒントクイズや、会話聞き取りクイズなどを行い、話の聴き方・話し方の指導をしている。話は最後まで聴く、発言は手を挙げて言う、などの基本的なルールを身につけるようにしている。

【個学の中での関わり合い・ひびき合い】

9月から、わかば級とのぞみ級合同で朝の会を行ったり、休み時間に誘い合って遊んだりしているので、関わり合う場面が増えてきた。より多くの友達と関わり合うことで、様々なタイプの友達がいることを知り、自分とは違うタイプの友達を理解する良い機会になっている。遊びの中では、児童同士がぶつかり合ったり、嫌な思いをしたりする場面も度々見かけるが、教師からの支援によってそのような場面での対処の仕方や、気持ちのコントロールの仕方を学んでいる。

児童の実態から、友達の発言や行動を見て真似しようとしたり、教えてもらったり、教えてあげたりすることはできるので、そのような姿もひびき合う姿として考えている。教科によっては、個別学習がメインであったり、休み時間には一人で遊ぶことを好んだりする児童もいるが、生活単元学習の中で友達と一緒に活動する場面を設定することで、ひびき合う姿が見られるようにしていきたい。

4 単元と指導について

【単元について】

個学では、領域・教科を合わせた指導として生活単元学習を行っており、他の教科と比べて児童の主体性を大事にして活動を進めている。今年度は、年間を通して畑を活用した野菜作りや、校外学習などで季節ごとに自然を見つける活動を計画・実施している。体験的な活動が多い中、教師に決められたことをやるのではなく、児童と相談をしたり、児童の意見を取り入れたりして活動内容を決め、学習を進められるように意識してきた。

本単元では、秋の自然を見つけ、それを使った遊びを通して児童の力を高めたいと考えている。季節によって移り変わる自然の様子に気づき、見つけた植物から作りたいものを考え、友達との関わりを通して遊びの範囲を広げていけるような流れの単元を考えた。特に、児童が興味・関心をもって取り組めること、友達との関わりを大事にした活動になることを目指している。

【指導について】

言葉だけでは理解が難しい児童もいるので、これからどのような活動をするのか全体で確認する時や、自分がやりたい活動を選択する時には、実物（教師や友達の作った見本）や写真などを提示し、活動の見通しがもてるようにする。

これまでの学習で自分たちが拾ったどんぐりや松ぼっくりを遊びに活用することで、秋の自然に関心をもって活動できるようにしたい。しかし、作りたいものによっては、それだけでは足りないものもあるので、児童が家庭から持ってきたものや、教師が用意した木の実なども教材として使用していく。また、作品作りに必要な道具や材料を確実に用意しておくことや、個々の実態に応じてどこまで支援して活動させるかをしっかりと考え、指導者と支援者で連携をとって支援していきたい。

大人数の教室での活動に抵抗がある児童もいるため、クロームブックのグーグルミートを活用して、他の教室からの参加もできるように準備しておく。そのような児童は、児童同士で作ったものを見せ合う中で、「遊んでみたい」「みんながいる教室に行ってみようかな」という思いがもてるようになることを期待したい。

単元の前半は、一人ひとりの思いを大切に、主体的に活動できるようにしたいので、「このおもちゃを作ってみよう」「この遊びをしてみよう」「この作品を作ってみよう」という思いをもたせられるように個別に声を掛けたり、教師が作った手本を見せたりする。後半は、友達と関わりながら活動できることをねらうた

め、単元の途中で互いの作品を見合う時間を設定する。それにより、後半の活動で友達の作った作品を真似して同じようなものを作ったり、友達の作ったもので遊ばせてもらったりする姿を期待し、それを個学の児童のひびき合いの姿としたい。

5 単元構想

単元構想 個学 生活単元学習 「秋遊びを楽しもう」(全8時間)

単元のねらい
○秋の自然に関心を持ち、自然を使って遊びを楽しむことができる。
○どんな秋あそびをしたいか自分の考えをもつことができる。
○友達の遊びを見たり、一緒に遊んだりする中で、他者と関わりながら活動することができる

夏野菜を育てよう

- ・たくさん穫れたね
- ・キュウリが大きいよ
- ・ナスもいっぱいだね
- ・サツマイモのつるがたくさんあるね
- ・サツマイモのつるがそんなに長いんだ

秋をみつけよう

@城址公園

- ・バッタがいたよ
- ・蝶がとんでる!
- ・大きなトンボだ!
- ・綺麗なお花があったよ

@城山公園

- ・どんぐりいっぱいだね
- ・松ぼっくりあるかなあ
- ・虫いないかなあ
- ・きれいな葉っぱがあるよ

つるを使って遊ぼう

- ・引っ張ってもちぎれないね
- ・綱引きで勝負だ!
- ・電車ごっこもできるよ!
- ・他にももっとやりたいね

リースをつくろう

- ・どんな飾りをつけようかな
- ・どこに松ぼっくりつけようか
- ・リボンとかモールで飾り付けようよ

秋遊びを楽しもう

拾ったどんぐりや松ぼっくりで何ができるかな ①

- ・おもちゃが作れるよ!
- ・音が鳴るものもいいね

どんなものがつくれるかな

- ・こま
- ・マスカス
- ・マスコット
- ・どんぐりの迷路
- ・やじろべえ
- ・松ぼっくりのクリスマスツリー

おもちゃをつくろう ②③④⑤

- ・いいおもちゃになるといいな
- ・色も塗りたいな
- ・どこに飾りをつけよう
- ・時間があるから他にも作ろうかな
- ・みんなはどんなおもちゃを作ったのかな

みんなでおもちゃを見せ合おう ⑥(本時)

- ・こんなおもちゃが作れたよ
- ・すてきな作品だね
- ・この飾りがきれいだな
- ・僕も遊んでみたい
- ・触ってみたいな

みんなのおもちゃであそんでみよう ⑥⑦(本時)

- ・このおもちゃ楽しい!
- ・もっといろんなおもちゃで遊んでみたいな
- ・僕もこれ作ってみたい!

さらにつくってみよう ⑦⑧

- ・あの子のおもちゃみたいにつくれるかな
- ・もっといいものをつくりたいな

＜1段階＞
おもちゃづくりに関心を持ち、教師と一緒に取り組もうとすることができる。
＜2段階＞
おもちゃづくりを、教師の援助を求めながら、進んで取り組むことができる。
＜3段階＞
おもちゃづくりのための知識や技能を身に付け、自ら進んで取り組むことができる。

＜1段階＞
伝えたいことを思い浮かべたり、選んだりすることができる。
＜2段階＞
簡単な語句から事柄を思い浮かべ、作品の工夫について考えたり、伝えたりすることができる。
＜3段階＞
相手の話に関心を持ち、自分の思いや考えを相手に伝えたり、相手の思いや考えを受け止めたりすることができる。

＜第1段階＞
友達のおもちゃで遊ぶとすることができる。
＜第2段階＞
おもちゃを通して他者と関わろうとする意欲をもつことができる。
＜第3段階＞
自ら進んでおもちゃを通して他者と関わり合いながら、活動することができる。

おもちゃの見本や写真を見せて、どんなものを作るか見通しが立てられるようにする。

自分の作りたいおもちゃが決められない場合は個別に話して決める。

必要な材料はあらかじめ用意しておき、どんなものがあるのか知らせる。

教師が見本を作り、自分が作りたいもののイメージをもてるようにする。

作成したおもちゃの工夫したところや、使い方を一人ひとり発表する場を設定する。

話し合いへの参加が難しい子はMeetを使ってオンラインでの参加をする。

工夫やがんばったところの発表が難しい児童はおもちゃの実演をして発表したこととする。

6 本時について

(1) 本時の目標

○ 友達遊びを見たり、一緒に遊んだりする中で、他者と関わりながら活動することができる。

(2) 個別の目標（別紙参照）

(3) 本時の展開

学習活動	主な支援・留意点・【評価】
みんなで おもちゃを みせあおう マラカス クリスマスツリー マスコット <u>けんたま</u> まとあて <u>どんぐりのめいろ</u> <u>やじろべえ</u> こま (当日追加?) おもちゃで あそぼう おもしろい あそんで みたい つくって みたい もっと おもちゃを つくろう つぎのかつどう 机の配置 (真ん中で遊ぶ)	・ 前時までの学習をふりかえり、本時の活動を確認する。 ・ たれが何のおもちゃを作ったか分かるように、おもちゃごとに示す。 ・ 作ったおもちゃの工夫したところを、言える子は言葉で言ったり、難しい子は実際にあそんで見せたりしながら発表させる。 ・ わかばの教室で参加できない子は、オンラインで参加したり、遊ぶ場面から参加したり、できるところから参加するようにする。 ・ 机の配置を口の字型に変え、真ん中で遊ぶようにする。 ・ おもちゃと作った子どもの名前を机に示し、どこで遊ぶのか分かりやすくする。 ・ 友達と一緒に遊びながら、遊び方や作り方の交流をさせるようにする。 ・ 子どもの発言したことや、つぶやきから子どもの感じていることや気持ちをくみ取り、次時の活動へつなげるようにする。 【評価】別紙参照

15

7 実践を終えて

<成果>

- ・ 秋の自然でおもちゃ作りという活動は児童にとって身近な題材であり、児童の実態に適していた。秋の自然を見つけに公園へ行き、見つけた自然を使ってどんな遊びをしようか考え、作るという単元の流れや、学習問題も児童に適していた。
- ・ 教師の作ったおもちゃのモデルがあったことで、活動の見通しがもて、良かった。
- ・ おもちゃを通して、友達と交流できている児童がいた。発表の時に実際にやってみせることで、他の児童が引きつけられ、よく見ていた。(ひびき合いの場面)
- ・ 振り返りの時間に、次の時間にさらに作ってみたいものを発言することができていた。

<課題>

- ・ 発表の時間が長く、交流の時間が短くなってしまったので、交流の時間を長くし、その中で発表する形をとれると良かった。
- ・ おもちゃの内容によっては、友達との関わりが見られなかったもので、そこを意識して自然と関わりが生まれるものを作ると良かった。的当てゲームのところは、関わりが見られた。
- ・ より自由に関わりがもてる場作りを考えていきたい。発表の場面からコの字型の座席にしたり、発表者に拍手をしたり、児童の自由な交流を通して発表したりすることが考えられた。
- ・ 3学級の児童が合同で学習し、関わりが生まれるように活動を組み立てることができたが、人数の多さや環境に慣れていない児童もいるため、今後も継続していき、このような学習形態に慣れさせていきたい。